# 1歳児クラスにおける食文化の獲得過程
## ― N保育園1歳児クラスの事例を通して ―

根　津　明　子

The acquisition process of the gastronomic culture in a 1 years-old child class
- Through the Practice of "N" Nursery -

Akiko Nezu

## はじめに

本稿では、N保育園の1歳児クラスにおける「食事場面」を通して、食べることについての子どもの「主体性」がどのように獲得されていくか、そして、それを保育者のどのような行為が支えているかについて取り上げる。このことを、筆者が定期的に採取した保育の映像記録の「食事場面」の分析を通して述べる。分析とその解釈に際し、保育者による保育計画と記録にみる記述を手掛かりとした。なぜなら、1歳児の段階では、子ども自らが食具を適切に用いて食事をすることについての自立を図ることが、保育の目標の大きな部分を占めており、保育者の実際のかかわりとその背景にある考え方は、1歳児の食文化の獲得を左右すると言えるからである。

先の分析を通して示したいことは、ものを「食べる」という行為が、1歳児の子どもにとって、空腹を満たし、健康を維持するためだけにあるのではないことである。初めは空腹を満たす喜び、好きな食材への関心に気をとられていた1歳児クラスの子どもたちは、やがてクラスの仲間や保育者と食卓を共にすること自体が「楽しい」という様子をみせるようになる。初めは、黙々とただ食べていた子どもたちが、周囲に座る他児に目を向けたり、食べることには関係のない動作をしたり、言葉を発したりすることを楽しむようになる。

食べることには直接向かわない食卓を囲む仲間との「楽しい」かかわりは、時として食事を食べるという行為の進行を妨げる要因ともなる。この子どもの食べることに直接向かわない行為、かかわりに対し保育者がどのように応じるかによって、その後の子どもの「食べる」ことのへの楽しみ、いかえれば食べることについての「主体性」の生成が大きく左右されると考える。

以下ではまず、1歳児以前、つまり0歳児の時期の食事場面の「主体性」の発揮が、保育者からどのように受け止められているかを簡単に振り返った後、1歳児クラスにおける食事場面における保育者と子どものかかわりについて述べていく。

## 1. 1歳児以前の食事場面における「主体性」の発揮

すでに拙論[1]で述べたが、1歳児以前では、食べることについての子どもの「主体性」は、保育者が差し出す食べ物の載ったスプーンを積極的に受け入れる、あるいは、自分から手づかみで食材を食べるということで、一旦は認められる。子どもの食べることへの積極的な行動は、それだけではない。保育者が食事の準備を始める段階から、その行動を目で追い、食事が始まることを察知するようになる。言い換えれば空腹だけが食事

を予感させる合図ではないのである。保育者は毎日同じような時刻に同じような行為を繰り返すが、空腹になった0歳児の子どもは、その保育者の行動パターンを逐一目で追っている。そして、「大好きなミルクがのめる」、「空腹が満たされる」という期待をもって、離乳食の準備をする保育者の動きの一部始終を目で追うようになる。やがて、準備が整うと保育者が子どもを迎えに来てくれる。離乳食の始まりのころは、この段階では子どもの表情にはほとんど変化は見られないが、中盤になると、保育者が「まんましよ」という言いつつ抱き上げる段階で、子どもは実にうれしそうな表情を見せるようになる。そして、保育者に抱かれて用意された離乳食を見て、保育者と顔を見合わせるようにして、実にうれしそうな顔をする。ここからは、子どもが離乳食を食べることを楽しみにするようになっていることが読み取れる。この段階になると、子どもは自分から離乳食を手でつかみ食べることができるようになる。

0歳児における離乳食開始の段階では、一つひとつ新しい食材を受け入れていくよう、保育者から援助される。子どもはまず食刺激に反応するが、食事場面を構成する茶碗、皿、おてふき、エプロン、等の構成要素についても反応を示すようになる。この段階ではスプーンも皿も、時には食事の内容物もまずは「もてあそび」の対象でしかない。離乳食の時期には、やがて「お行儀が悪い」と評されることになる「つかみ食べ」が積極的に認められる。食刺激に対応することと、食事場面の構成要素に対する「正しい」アプローチ、つまりその社会に共有されている、食べることについての一連の行為の獲得は、同時には生成されない。N保育園では、1歳児ではたいていの子どもができるようになるが、食事の前に自分から手を洗う、椅子に座ってみんなが揃うまで待っている。みんなが揃ったら「いただきます」といってから食べることができる、等々といった食事場面における一連の行為については、ほとんど自分から行うことはできない。0歳児の時期は、子どもは手づかみで食事することはできるようになるが、子どもの食べることへの初期のアプローチは、食文化の獲得という観点から見れば、非常に原始的な段階である。保育者はそのことを認めたうえで、0歳児の子どもが「自分からたべるようになった」と判断している。

繰り返しになるが、この段階では、保育者によってスプーンで運ばれる食材を嫌がらずに受け入れ咀嚼し飲み下す、あるいは子ども自らが食材を手でつかみ、口に運び、しっかりと咀嚼し、のみくだすという行為を行えるようになった段階で「自分で食べることができた」と、離乳食を食べることについての子どもの「主体性」が、保育者によって認められるのである。

## 2. 保育計画に見る保育者のまなざしの変容

では、1歳児になった子どもに対し、保育者はどのように考え、かかわっていくのだろう。P89~91に示した表1）表2）は、0歳児から1歳児クラスに上がった子どもたち9名と新たに入園してきた子どもたち、計15人の子どもたちの食事に対する保育者の子ども理解と食事援助対するねらい及びかかわりの際の配慮をまとめたものである。

表1）は4月から6月の指導計画と記録を、表2）は7月から10月までの指導計画と記録を、食事に関する項目を取り出して週ごとにまとめたものである。この二つの表を比較して見ると大きな違いに気付く。それは表1）では、子どもの月齢にかかわらず、食事をまず「食べた」かどうか、または、「自分から食べた」かどうかについての表記がほとんどである。それに対して表2）では、食事の

際のテーブルに着いた時の「座り方」、「姿勢」、「スプーンの使い方」、自分で口に運ぶ「一口の量」、「意欲的に食べる」こと、「苦手なものでも食べてみること」に表記が集中している。また、表2）では、低月齢児と高月齢児の表記がそれぞれ分けて書かれており、この表記の仕方は3月末まで継続されている。

7月以降を境に子どもの様子がいきなり変わるわけではないが、おおむね子どもたちが自分で食事を口に運ぶようになると、食事場面における保育者のかかわりの観点は、子どもが食事の「良きマナー」に従って食べることへと移行したととらえることができる。子どもが単に意欲的に「食事」の内容を食べたか否かにではなく、「食事」をめぐる「食行為」全般を子ども自らが実践することに、援助の重点を置くようになったのである。実際に食事に関する記述は、7月以降、ほとんど「食事」をめぐる子どもの「良きマナー」獲得を巡る評価の記述が中心となっている。例えば、「スプーンを使って食べる」、「皿に手を添えて食べる」、「こぼさないようにしっかり口に中へ運ぶ」、「正しい姿勢で食べる」、「足を床について食べる」、「食べ残しをスプーンで集めて最後まできれいに食べる」という記述が並ぶ。

では、実際1歳児クラスの子どもたちの食事場面はどのように変化していくのだろう。0歳児の段階でさえ、子どもは「食行動」をめぐる一定の「規範」に沿うことで、その「自立」、つまり「自分でたべられるようになった」ことが、保育者によって認められた。当然のことながら、1歳児では沿わねばならない「食行動」の規範は、0歳児の時期と比べ大きく変わる。以下では、実際の食事場面のビデオ記録を基に、1歳児の「食行動」がどのように変化していくかについて見ていきたい。ここでは、高月齢児を中心に、食事場面における保育者の援助の観点が、食事をめぐる「良きマナー」の獲得へと転換した7月から、高月齢児が「良きマナー」を自ら行おうとするようになると同時に、それをあえてずらすような行為が出現するようになる10月までの姿を追う。

## 3. 1歳児における文化的行為としての「食行動」の自立の過程

7月に入ると、高月齢児と低月齢児は分かれて食事をするようになる。この年（2008年）の1歳児クラスでは、高月齢児と低月齢児では、食事前の遊びにおける活動量が大きく異なり、空腹になる時間、食べる速度、必要とする援助の内容もかなり異なっていたからである。

このころになると、高月齢児はスプーンを上手持ちし、ご飯、おかずをスプーンですくって食べる回数が増えるが、おかずの形状によって手づかみになることもしばしばある。スープやみそ汁は汁を飲んだあと、実を手づかみで食べることが多い。また、食事の最初から終わりまでずっと座っておらず、食べることに飽きると途中で席を立つ姿も見られる。

【エピソード1：7月16日（火）】

遊びから戻り、着替えが終わった子どもから、手を洗い、順次席に着く。高月齢児がつくテーブルは高いものに変わり、テーブルにはそれぞれの子どもの席の目印を示すシールが貼られている。高月齢児のほとんどが席に着くと、その日の当番の保育者が子どもたちのエプロンの入ったかごを持ち、歌を歌いながらエプロンを配っていく。

♪「おなまえをよばれたらすぐ、げんきよくはいっていいましょう。ババンババンバン」

「バン、・・・Gaくん」①と保育者に歌いかけられると、Ga「へーい」②と反応する。保育者が「くすくす、もう一度聞いてみよう」③と言い唄を繰り返すと、Haが「へーい」④とまねる。Saの番になると、GaはSaの手を持ち、手をあげさせようとする。Saが嫌がる様子を見せたので、Gaやめる。保育者が「Saちゃ〜ん」といいなおす⑤と、Saはうれしげに手をあげ⑥、保育者にエプロンをつけてもらう。順次歌を歌いながらエプロンを配り終えると、保育者は子どものテーブルの前に置いた椅子に紙芝居を持って座る。紙芝居を始める前に、保育者が自分の手を挙げながら「エプロン上手につけてる人」⑦と呼びかけると、子どもたちみんなが「ハーイ」というかのように、笑顔で手を挙げる⑧。そのあと、紙芝居が始まると全員紙芝居を熱心に見ている⑨。紙芝居のあと、保育者の「いただきます」で食事の配膳が始まる。保育者たちは食事を八分目までは食べさせる努力をしている。食事の間子どもたちは食べることに集中⑩しており、子ども同士の会話など、かかわりはほとんどない⑪。スープ、ご飯をすっかり食べてしまうと、保育者に向けてからになった器をかかげるようにして見せる⑫。保育者から、「あー、ぴっかぴか」といわれると嬉しそうな顔をする⑬。保育者は食べている子どもには、「おいしいね」、「すごい」、「じょうず」⑭という言葉を繰り返しかけている。すべて食べ終わった子どもが空になった器を保育者に見せると「すご〜い」、「よくたべたねぇ〜」⑮と保育者が応える。その言葉を聞くと、どの子どももうれしげな表情⑯で器をテーブルに置き、歯磨きをするために水道に向かう。

この時期の高月齢の子どもたちは、みんなで一緒に紙芝居や絵本に見入ったり、一緒に「いただきます」が言えたりするので、クラスの仲間と一緒にいること、一緒に同じ体験をし、一緒に保育者の呼びかけに応えることを楽しんでいるように見える。①、②に見るような子ども同士の掛けあいのような状況が一瞬生まれるように見えるが、基本は子どもの関心は保育者に向けられている。食事の場面では、それぞれの子どもの関心は、まずは食べることにむけられ（⑩、⑪）、同時に保育者とのかかわりに向けられている（⑫）。食事をよく食べたことを保育者にみとめられ、「すご〜い」、「よくたべたねぇ〜」（⑭、⑮）等といわれることがうれしいように見える（⑯）。言い換えれば、この時期の食卓における高月齢児たちの関心の方向は、基本的に保育者とのやりとりに向いているといえる。保育者によく食べたことを認めてもらうことがうれしいのである。

【エピソード2：8月26日（火）】

絵本の読み聞かせが終わると、高月齢児に食事が配られる。それぞれ自分からスプーンを上手持ちし、スプーンを使ってご飯、おかずを食べている①。GaとArが「…だねぇ〜」と何か話すようにみえるが、すぐ食べることに戻る②。Gaときどき保育者に何か話しかける③。他の子どもはご飯やおかずを食べながら、ときどき自分の隣に座る子どもの方向に目を向けるが会話はない④。低月齢児のNoは指定の椅子に座ろうとせず、テーブルの前にたったまま泣いているが、高月齢児たちはそれを気にする様子もなく、食べることに集中⑤している。テーブルを囲む他児がほとんど食べ終わり、それぞれに保育者に「ぴっかぴかー」と言われているのを聞き、Naは

まだご飯の入っている自分の椀の中を保育者に見せるように、一旦かかげるが、そのあとまた食べ始める⑥。

子どもたちは皆デザートの果物が大好き⑦で、特にスイカやメロンには目がない。低月齢の子どもたちは一旦果物を目にすると、目の前のご飯やおかずを食べることを放棄し、ひたすら果物が欲しいとぐずる。高月齢の子どもたちは、カバーで隠されていても、果物が自分たちのテーブルの後ろの棚に置かれていること⑧、そして、ご飯、おかずをしっかり食べれば、必ず果物がもらえることも了解⑨している。先に食事を始めた低月齢児が果物を食べているところを見ても、騒がずにしっかりご飯とおかずを食べている⑩。

8月にはいり、変化したことはスプーンを上手持ちにし、食事ができるようになっていることである(①)。もうひとつの変化は、それまで保育者にはかかわりを求めても、同じ食卓を囲む他児に目を向けることはほとんどなかった子どもたちが、そばで食べている子どもに視線を向けるようになっていることである(④)。ただこの時点では目立った会話や行為の同調等はみられず(②)、子どもの関心はやはり保育者に向かっている③。高月齢児が食べることに集中していることは、例えば自分たちが食べているそばで、低月齢児のNoが泣いていても、それに乱されることなく食べ続ける姿から伺うことができる(⑤)。

他児が食べ終わり空になった椀を保育者に見せ、保育者から「ぴっかぴかー」といわれているのを見て、Naもそれに同調するような様子を見せる。ここからはNaが保育者とのかかわりを求めていることがうかがえる。しかし、他児に同調しかけ、保育者とのかかわりに向かおうとしたNaが、その行為を一旦停止し、食べることに戻ったことから(⑥)、まだ全部を食べ終えていないということ、全部食べ終わると初めて保育者から「ぴっかぴかー」とは言ってもらえることへの認識がNaにあることがうかがえる。

また、低月齢児とことなり、高月齢児は食事の流れ(ご飯、おかずを食べた後に果物を食べる)を了解しており、大好きな果物が身近にあることが分かっても、それに乱されることなく食事を続けることができる(⑦、⑧、⑨、⑩)。食事に関する嗜好は誰しも持っており、好きなものは月齢を問わず「もっと頂戴」といい、嫌いなものはできれば食べないで済ませようとするが、高月齢児は出されたものを一通り食べるようになっている。

9月に入り通常の保育がもどる時期から、高月齢の子どもたちは、保育者やテーブルを囲む他児に向けて、「ちゃんと食べられるぞ」「ちゃんと食べたぞ」とでもいうような示威行為が出るようになる。低月齢児は食事をしながらそういう姿にときどき眼を向けている。

【エピソード3;9月16日(火)】

この日は、高月齢児はすでに食事の準備が始まっている中、保育者が低月齢児に向けて絵本『もこもこ』を読みはじめる。低月齢児は全員じっと絵本に目を向け見ているが、高月齢児は食事をしながらも、保育者の読む声に応じて、手振りや語尾の音に合わせて身振りで応答している①。保育者が次の絵本『もけらもけら』を読み始めると、高月齢児のArは食べることを中断して、「きらっきらっきらっきらっ、てはおひざ〜」②としぐさとともにいう。Yi、Ga、Haも絵本のセリフに応

答して、セリフをなぞるような手振りをする③。高月齢児の介助を担当するM保育者がおかずのヒジキを見せ、やわらかにゆっくりと「これなにかな?」④と聞く。Arは「きらっきらっきらっきらっ、いただきま〜す」といい、そのあと、食べることに戻る⑤。そのやり取りをそばで見聞きしていたKaがスプーンでヒジキをすくい、保育者に見せるようにしてから自分の口に入れる⑥。しばらくして、いつも食べ終わるのが遅いSaは、低月齢児が絵本の読み聞かせをしてもらっているときも自分のペースで食事を続けていたが、ご飯を食べ終わるとテーブルを囲む他児や保育者に、ご飯の茶碗を見せるようにして、「ぴっかぴか〜」と得意げに大きな声で言う⑦。食事介助をしていた3名の保育者がそれぞれに「すご〜い」とゆるやかな調子で言うと⑧、Saはうれしげに茶碗を下す⑨。

それまでは、ほぼ完全に低月齢児が先に食事をし、高月齢児はそのあとから食事という順番だったが、散歩や、戻ってからの着替えなどに時間がかかると、この日のように高月齢児が先に食事をするということがたまにある。

低月齢児が読んでもらっていた絵本『もこもこ』、『もけらもけら』は高月齢児も大好きな絵本で、すでに何度となくり返し読んでもらっている。また、自分でも絵本コーナーで開いて見ていることが良くある。場面と言葉をすべて覚えているのかどうかは定かではないが、「ぷぅー」と膨らむシーンなど、特定の場面に来ると言葉をなぞったり、身振りで応答したりする。この日、高月齢児のArは、食べることを中断して、身振りと共に読み聞かせに参加している（①、②）が、それに追従するようにYi、Ga、Haも絵本の内容に反応するしぐさをする（③）。食事中の高月齢児が、大好きな絵本の読み聞かせに気をとられて、食べることが中断した格好になるが、援助しているM保育者は、このときテーブルの上の食材に話題を移すかのように、誰にともなく、ゆっくりと柔らかな調子で「これなにかな?」と問うようにいう④。すると、真っ先に絵本に反応していたArが絵本の読み聞かせの時によく行う「きらっきらっきらっきらっ、手はおひざ〜」の前半部分をうたい、すぐそのあとに「いただきま〜す」と続け、食べることに戻る。絵本の読み聞かせに同調し、関心も残しつつも、自分の課題に戻る姿ととらえることができる。さらにArと保育者のかかわりをそばで見聞きしていたKaが、スプーンでひじきをすくい保育者に見せるようにしてから自分の口に入れた姿から、KaがM保育者の問いかけに応えたかのようにヒジキをスプーンですくって、自分の口に入れている⑥。この姿から、テーブルを同じくする子どもが他児及び保育者の動向に関心を持っている様子が見て取れる。

また、いつも食事に時間がかかるSaが、いつもより少し早くご飯を平らげることができたことを誇らしく感じていることが茶碗を掲げて見せつつ「ぴっかぴか〜」⑦という一言から伺うことができる。その日の保育者全員に「すご〜い」といってもらえた⑧ことが、Saにとりとてもうれしかったことがその表情から読み取れる（⑨）。保育者から認めてもらえることは、子どもにとって無上の喜びであるらしい。保育者に承認されるこが、子どもが「食行為」においてその「主体性」を発揮することに重要な役割を持っていることが分かる。

## 4. 子どもの「食行動」形成における「食卓」を囲む意味

ここまで述べてきたエピソードでは、高月齢児

の子どもの課題はより良い「食行為」のなかでも、「お行儀よく」、「残さずしっかり食べる」ことにあり、それができた時保育者に「良きマナー」として承認され、褒められることが、子ども自らが食べることに向かう動機形成のきっかけとなっていることが分かる。好きな食事の内容だったり、好きなデザートがあったり、そして、最後に保育者から「ぴっかぴか～」と褒められることが「自分から」、「主体的に」食べることに向かっていく子どもの動機形成の要因であるといえる。

しかし、10月にはいってから自ら食卓に向かう子どもの動機は、「食べること」に加え、テーブルを囲む他児とのかかわりの楽しさにひかれるという要因が加わるようになっていく。そして、そこでは一見「良き食事マナー」に反するように見える行為もでてくる。いかにまず、エピソードをあげよう。

この時期、高月齢児はスプーンの持ち方を上手持ちから下手持ちに切り替える指導が始まっている。食具の持ち方、椅子に行儀よく座る、皿に手を添えて食べるということが、保育者の援助の内容になっている。

また、これまで保育者とのかかわりを求めていた子どもたちが、それまでとは異なり子ども同士の応答を楽しむようになる。そのため、しばしば食べることが中断することも起きる。おしゃべりに夢中になり食べるのが遅くなる子どもがいる一方で、早々にたえおわっても、隣り合う者同士3人くらいでテーブルに座り続け、タオルをいじったりしながら言葉のやり取りをする姿も見られるようになる。

【エピソード4；10月26日（火）】

この日は、おやつの後から昼の食事前までの時間に、高月齢児と低月齢児が一緒のグループを3つ編成し、其々違う場所に散歩に行ったり、遊んだりした。高月齢の食事がすでに始まっている中、Ｈａが最後にテーブルに着く。Ｈａはすこし食べた後、「ミミズがいたのぉ～」とやおらいう①。それに応えるように。同じグループだったArが「…いたのぉ～」と続ける②。そのあと、同じテーブルについていたYiが、そばにいる保育者に「こぉ?」といいながら、スプーンを下手持ちに持った右手を眼前にかかげるようにみせる③。それに続けるようにKaがスプーンを下手持ちし「Kaちゃんのこぉ」④といいつ手前に突き出して見せる。そのあとHaとは別グループだったKaが「だんご虫…」⑤という。Kaと同じグループだったGaが加わるように「だんご虫～」⑥という。さらにＮａが「Ｎａちゃんも～」⑦と参加する。M保育者が「むしむししたの～?」⑧この流れに合わせるかのようにと言う。Haは保育者の方に向き「Haくんだんご虫みたの～」⑨という。それに応えるようにGaが「だんご虫こ～んないたんだよ～」⑩と両手を広げる。Haは♪「ぞうさんだんごむし～」と節をつけていう⑪と、さらに「お～きいだんご虫いたのぉ～?」とGaに問いかけるようにいう⑫。Gaは「つかまえたんだよぉ～」⑬という。保育者はこのやり取りに相槌を打つように「そうねぇ～」とゆったり言う⑭と、ややあってから「たべてね～」⑮とおかずの残っている皿をGのそばに寄せる。

それから少ししてから、GaとHaが口に入れ咀嚼しているおかずを、「べぇ～」と舌を突き出し見せあうような行為を3~4回繰り返す⑯。保育者は何も言わず見守っている。さらにすこしたつと、高月齢児、低月齢児共に

ほとんどの子どもが食べ終わる。まだ食べ終えていないHaがやおら「おい、でてこ〜い⑰」という。さらに「おばけでぇ〜」⑱と続ける。Naが「はいおばけ〜」⑲という。Ka、Yi、Na、Haが一緒に♪「ではばいばい〜」⑳という。散歩の時にHaとおなじグループだったSaがややおくれて♪「ではばいばい〜」㉑というと、Haは♪「ではばいばい〜」、♪「ではばいばい〜」と繰り返す㉒。Sa♪「ではばいばい〜」と応えると、Haが♪「ではばいばい〜」をかえす㉓。保育者がそこに「ごはんたべたぁ」㉔と緩やかに問うが、Haはそれに応えず、「おいでてこ〜い」という。Na「おいでてこ〜い」と応じる㉕。Haはもう一度「おいでてこ〜い」というと、次に「ではばいば〜い」㉖という。Ka、Yi、Sa、Naとテーブルを離れていくと、Haが食べることを再開する。

テーブルに一人残り、デザートの梨を食べているHaに、歯磨きを終えたGa（梨が好物）が近づき、Haに「ねぇ、なし?」と聞く㉗。自問自答するように「ないか」というが、「みてみな」とやおらHaの口元を両手であける㉘。そして、Haの口の中をのぞきこむようにして「あ〜、なしが〜、たべちゃって…」㉙というと手を離し、つづけて「Ga君みたいにあ〜むって食べると〜」といいつつ、Haのお皿に残っていたなしを手にとり、「たべちゃってよ〜」と眼前につきだして、またお皿にもどす㉚。この様子を保育者たちは笑顔で見守っている㉛。Gaはそのあとすぐ保育者に付き添われてトイレに行く。Haは何事もなかったように、梨を全部たべおわる㉜。

これまでのエピソードでは、基本的に子どもたちは「良き食事マナー」の獲得に向けて保育者に援助され、「良き食事マナー」を獲得したと認められることに喜びを見出す姿があった。このエピソードは、これまでとことなり、まず子ども同士の会話が急に増えていること（①〜⑬、⑰〜㉖、㉗〜㉚）、さらに、その会話の内容が食べることにかかわることではなく、散歩の時の体験から出たと思われる内容、また、「おいでてこ〜い」、「おばけ〜」、や「ではばいばい〜」といった、聞く者にはその意味がすぐにはわからない言葉のやり取り（⑰〜㉖）がつづいていることがある。これまでと異なり、基本的に子どもと子ども同士のかかわりがほとんどになっており、保育者はほとんど子どもたちのテーブルにつき添ってはいるが、保育者の発話はわずかしかない（⑭、⑮、㉔）。また、このエピソードでは、「良き食事マナー」には反するような、口に一旦含んだものを出すという行動も見られる（⑯）。

子どもたちは、基本的には保育者が望む「良き食事マナー」をすでに行えるようになっている。つまり、所属する文化で認められる食事マナーの規範をほぼ身につけているのである。この「食行為」の規範を身につけたということと、エピソードに見られる子どもの行為は一見反するように見えるかもしれない。しかし、この逸脱とも見える行為は、「食行為」についての一定の規範を身につけたからこそ、出現する物ととらえることができる。このエピソード以前の子どもたちは、保育者に励まされ、手直しされながら、「良き食事マナー」と保育者が認めてくれるような行為をできるよう、一生懸命だったのである。だから、正しい食事行為を行った、つまり規範に沿って、全部の食事をよく噛んで食べることができた、お皿が「ぴっかぴかー」であることを保育者に承認してもらうことがうれしかったのである。従ってこの時期の子ど

もたちは、規範に沿えるようになることには一生賢明で、それを獲得する以前にはその規範をずらすような行為をすることはないといえる。

では、一旦獲得したはずの「食行為」の規範をあえてずらすような行為、例えば咀嚼している食べ物を吐き出す、あるいはおしゃべりに気をとられ、口に食事を運ぶことがお中断されるという行為には、どのような意味があるのだろう。言い換えれば、それはできるならないほうが良いことなのだろうか。

多くの保育者の立場からすれば、おそらく正当な「食事マナー」に外れる行為は、生起しないほうが良いものとみなされるだろう。なぜなら、多くの保育現場では、「お話ばっかりしていないで食べなさい」、「よそ見してないで食べなさい」、「遊ばないで食べなさい」と注意する保育者と、なかなか保育者の言には従おうとしない子どもとのあいだで、しばしば小競り合いが生起するからである。

しかし、私はこの一見食べることには直接向かわないようなかかわりを楽しむ子ども同士のかかわりの行為にこそ、食卓を一緒に囲む意味があると考える。言い換えれば子どもが「主体的」に食卓に向かうのは、「物を食べる」ことへの期待と喜びに加え、クラスの子どもと食卓を囲むことで生まれる楽しさへの期待があるからだと考える。それが自ら食べることへの「主体性」を育てる重要な要因ではないだろうか。

しかし、多くの保育者や親が、さきのエピソードにあげたように、食卓を囲む楽しさを子どもと共有できるかといえば、そうではない。むしろ、多くの保育者は食べることに直接向かわない子どもの行動を認めたがらない。例えば事例として挙げた指導計画、記録に子どもが自分で食べることを援助する為に保育者が配慮することは、少しずついろいろなものを食べられるようになること、食具の使い方、テーブルマナーを「さりげなく」教えていくことといったことに保育者の意識は向かっている。食卓を囲むことで生成されるはずの、子ども相互の楽しいやり取りが重要であると記述がないということから推測すれば、その認識は保育者間で共有されているとは言い難い。

## おわりに

### ―「食育」が孕む二面性と保育者の役割―

2005年に「食育基本法」が施行された。それに伴い、各保育・教育施設及び地域、仮定における「食育」が重要という認識が流布され、翌年には「食育推進基本計画」が策定された。今や、どの保育所・幼稚園、小・中学校で「食育」を行うことは当たり前のようになっている。問題はその「食育」の中身である。今後の課題として「食」にかかわる保育、教育はどうあるべきかを述べておきたい。

先に述べた「食育基本法」の危うさを指摘したのは池上甲一、岩崎正弥、原山浩介、藤原辰史らのグループである。彼らは、「食と農は、人間が生きていくうえでもっとも基本的な条件」であることを認めながら、しかし、現在の日本では「生きること」とかけ離れた論理の中に食と農がおかれて」いるという。「食農教育」や食にかかわる「学習」は重要としながらも、そこにはナチス・ドイツが実行しようとしたような「食及び健康と動員」を図るような同型の危うさが、現代の日本にあることを指摘する。そして、「食育」が本来子どもたちが生きる根幹にかかわるような力を持つためには、新たな「食の共同体」を構築することが課題だという。

私には池上らが指摘するような深い危惧感はない。しかし、保育所や幼稚園での食事場面を目にする都度、生きる根幹を支える「食べる」とい

うことが、子どもにとり決して楽しい行為ではなくなってしまうような保育者のかかわりを見ることはある。そこに大きな危機感を感じている。多くの保育者たちは「食」の楽しみより、「食行為」の規範のみを子どもに浸透させようと躍起になっているように見える。

「食農教育」の隘路を抜け出、「食」へ「主体的」なかかわりを子どもの内に育てるとするならば、それは何より、仲間と「食卓」を共に囲むこと、そこに生まれる相互のかかわりが生み出す楽しさを大切にし、育てることにあるのではないかと考える。「一緒に食べるとおいしいね」と子どもが発する理由は、そこにあるのではないだろうか。

子どもにとって毎日の保育所や幼稚園での食事の時間が「一緒に食べるとおいしいね」となるか否かのカギを握っているのは、保育者である。保育者が子どもの「食行動」をどのように育てようとしているのか、名実ともに「一緒に食べるとおいしいね」の実現を低年齢のうちから重ねていくためには、どうすればよいかを今後も探究し続けたい。

参考文献：
池上甲一、岩崎正弥、原山浩介、藤原辰史　編著
『食の共同体―動員から連帯へ』2008年5月
ナカニシヤ出版

---

[1] 乳児において分化としての「食べる」行為はいかにして成立するか　―離乳食援助場面を通して―
根津 明子
日本教育方法学会第35巻（2009年）
2010年3月31日発行　47頁～57頁

表1　1歳児の食事場面（2008年/4月～6月）

| | 4月 | | 5月 | | 6月 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 今月の保育のねらい | ・自分で食べようとする。<br>・個々にあった食事を丁寧にすすめていく | | ・自分で意欲的に食べようとする | | ・（新入園児がいる為）新しい席、担当の保育者と安心して食べる | |
| 今月の保育者の配慮 | ・自分で食べようとする意欲を大切にし、苦手なものも一口でも食べられるようにはげまし、食べられたら多いにほめていく。<br>・成長の差が大きいので個々にあった食事を丁寧にすすめていく | | ・苦手なものも一口でも食べられるように励まし、食べられたら多いにほめていく<br>・成長の差が大きいので個々にあった食事を丁寧に進めていく | | ・特定の保育者がつき、おちついた雰囲気で食事ができるようにする | |
| 食事場面における保育者の子ども理解（先週の姿から） | 第1週<br>4/1（火） | ・良く食べている | 第1週<br>5/1（木） | ・良く食べている<br>・食事中立ってしまう子もいる<br>・個々の成長に合わせて食事の形態を変えていく | 第1週<br>6/2（月） | ・散歩後、疲れて泣く子がいたが、食事の時間になると泣きやんでたべてきた |
| 保育のねらい | ↓ | ・苦手なものでも一口でも食べる | ↓ | ・意欲的に食べようとする<br>・苦手なものでも一口でも食べる | ↓ | ・担当の保育者と安心して食べる |
| 保育者のかかわりについての配慮 | 5（土） | ・食べられたらたくさん褒める | 10（土） | ・意欲的に食べているときは見守り、ほめて自信を持てるようにする<br>・個々の食事のペースを大切にする | 7（土） | ・特定の保育者がつき好きなものを意欲的に食べられるようにする |
| 食事場面における保育者の子ども理解（先週の姿から） | 第2週<br>4/7（月） | ・良く食べている | 第2週<br>5/12（月） | ・良く食べている<br>・食事中立ってしまう子もいる<br>・苦手なものも声をかけ励ますと少し食べる子もいる | 第2週<br>6/9（月） | ・新しい席に戸惑う子はいなかった<br>・好きなものを良く食べていた |
| 保育のねらい | ↓ | ・苦手なものでも食べてみようとする | ↓ | ・自分で意欲的に食べようとする | ↓ | ・担当の保育者と安心して食べる |
| 保育者のかかわりについての配慮 | 12（土） | ・励まし、ほめていく | 17（土） | ・意欲的に食べているときは見守り、自信につなげていく<br>・個々にあった食事を丁寧に進める | 14（土） | ・特定の保育者がつき、落ち着いた雰囲気の中で食事ができるようにする |
| 食事場面における保育者の子ども理解（先週の姿から） | 第3週<br>4/14（月） | ・良く食べている<br>・月齢、成長差を考慮し、食事の形態を変えてもらうなどして、個々のペースの食事を勧めた | 第3週<br>5/19（月） | ・席を固定して食べるようにしたが、混乱もなく落ち着いて意欲的に食べている<br>・苦手なものでも声かけをすると食べたりできる子も出てきた | 第3週<br>6/16（月） | ・苦手な物を手ではらったり、床に落とす子が数名いた |
| 保育のねらい | ↓ | ・意欲的に食べる<br>・苦手なものでも一口でも食べる | ↓ | ・自分で意欲的に食べる | ↓ | ・苦手なものは「イヤ」等、言葉で言う |
| 保育者のかかわりについての配慮 | 19（土） | ・自分で食べられているときは見守り、励ましていく<br>・個々の食事のペースを大切にし、丁寧に対応 | 24（土） | ・意欲的に食べているときは見守り、ほめ、自信につなげていく<br>・個々にあった食事を丁寧に進める | 21（土） | ・自分の気持ちを伝えたことを褒めていく |
| 食事場面における保育者の子ども理解（先週の姿から） | 第4週<br>4/21（月） | ・良く食べている<br>・月齢、成長差を考慮し、食事の形態を変えてもらうなどして、個々のペースの食事をすすめた | 第4週<br>5/26（月） | ・戸外でもよく動くようになってきて、席に着くと意欲的に食べ始めている<br>・好きなものは、よくお代わりを要求する | 第4週<br>6/23（月） | 高）苦手な食べ物は、他児や保育者に励まされ、食べられる子もいた<br>低）好きと嫌いが出てきた |
| 保育のねらい | ↓ | ・意欲的に食べる。<br>・苦手なものでも、一口でも食べる | ↓ | ・苦手なものでも、一口食べてみる<br>・手を合わせ「いただきます」等の挨拶を行う | ↓ | 高）引き続き、自分の思いを言葉で言うとともに一口でも食べてみる<br>低）苦手なものでも一口でも食べてみる |
| 保育者のかかわりについての配慮 | 30（水） | ・自分で食べられているときは見守り、励ましていく<br>・個々の食事のペースを大切にし、丁寧に対応する | 31（土） | ・友だちの食べる姿を見せたりしながら、食べてみようとする意欲につなげていく | 28（土） | ・食べられるように励ましたり、「おいしいよ」と伝え、食べられたらたくさんほめる |

こども自らが直接食べることにむかう姿へのまなざしと配慮

直接「食べる」ことには向かわない行為、行儀（姿勢）、食具の使用へのまなざしと配慮

発達の落差へのまなざしと配慮

表２　１歳児の食事事場面（2008 年／７月～ 10 月）

| | 7月 | | 8月 | |
|---|---|---|---|---|
| 今月の保育のねらい | 高）食事の姿勢、座り方を教えてもらい、しっかり座ろうとする | | 低）スプーンを持って少しずつ食べられるようになる | |
| | 低）スプーンを持って食べてみる | | 高）正しい姿勢で食べる | |
| 今月の保育者の配慮 | 高）正しい座り方を教え、その都度声を掛けていく | | 低）スプーンの持ち方、すくい方をさりげなく介助し、使い方を知らせていく | |
| | 低）スプーンの握り方をさりげなく介助しながら使い方を知らせていく | | 高）姿勢が崩れたりした時、声をかけたり、姿勢を直したりして正しい姿勢を伝えていく | |
| 食事場面における保育者の子ども理解（先週の姿から） | 第1週 6/30（月） | 全）体も散歩でたくさん動いているので意慾的に食べられている。飽きると、怒ったり、皿を押すこともある | 第1週 8/1（金） | 全）スプーンをまだ上手く使えない子が多い。横を向いたり、足を立てて食べる子がいる |
| 保育のねらい | ↓ | 高）手を洗った後は自分の席で待つ | ↓ | 低）スプーンを持ってみる |
| | | 低）スプーンに慣れていく | | 高）食べ始めの時、正しい姿勢で座る |
| 保育者のかかわりについての配慮 | 7/5（土） | 全）姿勢やスプーンの使い方をさりげなく知らせていく | 8/9（土） | 低）少しずつスプーンを持たせる |
| | | | | 高）姿勢が崩れたら声かけしながら直したりして気付けるように促す |
| 食事場面における保育者の子ども理解（先週の姿から） | 第2週 7/7（月） | 高）おかわりをして、良く食べている。席に座っているが、飽きると途中で立つ | 第2週 8/11（月） | 低）スプーンを持たせたが、手づかみ食べになってしまう |
| | | 低）Yr、Sy以外スプーンを使う。手づかみもまだ行っている | | 高）食べ始めは正しい姿勢で座るが、すぐに崩れてしまう子もいる |
| 保育のねらい | ↓ | 高）食べ終わったことを知らせる | ↓ | 低）スプーンを持ってみる |
| | | 低）引き続きスプーンに慣れる | | 高）正しい姿勢で座る |
| 保育者のかかわりについての配慮 | 7/12（土） | アレルギー児が出たので担任全員で確認した後、食事を出す | 8/16（土） | 全）スプーンの持ち方、すくい方をさりげなく介助し、知らせる<br>全）正しい姿勢を伝えていく |
| 食事場面における保育者の子ども理解（先週の姿から） | 第3週 7/14（月） | 高）そばに大人がつけば立たずに食べることができるようになった | 第3週 8/18（月） | 低）スプーンで口に運ぶことはまだ出来ないが、握ってみる姿がある |
| | | 低）食事中、少しだけスプーンを持って食べたりできるようになった | | 高）ひざを立てて座る事があり、声を変えると直していた |
| 保育のねらい | ↓ | 高）正しいイスの座り方を知らせていく | ↓ | 低）スプーンで食材をすくってみる |
| | | 低）引き続きスプーンに慣れる | | 高）正しい姿勢で座れる時間が長くなる |
| 保育者のかかわりについての配慮 | 7/19（土） | 全）正しい座り方を丁寧に知らせていく | 8/23（土） | 全）無理強いせず、さりげなく介助していく<br>全）その都度声を掛けていく |
| 食事場面における保育者の子ども理解（先週の姿から） | 第4週 7/21（月） | 高）テーブルが低かったため、交換した。声を掛け、足を前にすると姿勢良く食べられている | 第4週 | 低）手づかみが多いが、いぜんよりも食材をスプーンですくう意欲が出てきた |
| | | 低）イヤイヤが出てきたので食べる意欲を大事にして、手づかみ食べに戻した | | 高）声を掛けると姿勢を直して食べる |
| 保育のねらい | ↓ | 高）声を掛けられながら前を見て座る | ↓ | 低）スプーンを持って、口に運ぼうとする |
| | | 低）自分で食べようとする | | 高）前を向いて食べようとする |
| 保育者のかかわりについての配慮 | 7/31（木） | 全）意欲を引き出せるような声かけをする（補足：自分で食べるという意味） | | 低）なるべくスプーンに（原文のまま）食べられるように声をかけ援助する |
| | | | | 高）トイレへ行けたらほめる |

こども自らが直接食べることにむかう姿へのまなざしと配慮

直接「食べる」ことには向かわない行為、行儀（姿勢）、食具の使用へのまなざしと配慮

発達の落差へ配慮が基本となっており、高月齢と低月齢は基本的に食事の時間やテーブルを別にしている

| 9月 | 10月 |
|---|---|
| 低）スプーンを持って食べる | 低）意欲的にたべる。スプーンを使って食べる |
| 高）1回に口に入れる量が分かるようになる | 高）正しくスプーンを使おうとする |
| 低）さりげない介助の声掛けをしていく | 低）食べられたことをほめ、さりげなくスプーンで食べられるように声掛けをする |
| 高）1回の口に入れる1口量を、その都度知らせていく | 高）スプーンを返さずに食べられるよう声かけをする |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第1週<br>9/1（月） | 低）手づかみで食べる子だいるが、スプーンを使って食べようとする子もいる | 第1週<br>10/1（水） | 低）大きいものは手づかみで食べているが、他の物はスプーンをつかっている。空になると見せるようになった |
| | 高）保育者が側につくと、正しい姿勢で食べていた。苦手なものも食べるようになっている | | 高）保育者に声かけされると正しくスプーンを使おうとする子、わざとふざけて使う子がいた |
| ↓ | 低）スプーンを使って食べてみようとする | ↓ | 低）苦手な物を一口でも食べる |
| | 高）1口量を保育者と一緒にすくってみる | | 高）スプーンを返さずに食べる |
| 9/6（土） | 低）さりげない介助、声掛けをしていく | 10/11（土） | 低）「見てるよ。」等と励ましながら、意欲につなげていく |
| | 高）口に入れる量をスプーンにのせて知らせていく | | 高）無理強いせずに声かけをする。できた時には多いにほめる |
| 第2週<br>9/8（月） | 低）まだ手づかみ食べは見られるが、意慾的に、スプーンを使うようになってきた | 第2週<br>10/14（火） | 低）励まされると1かじり1口食べられる時もあった |
| | 高）声かけをすると1口量がわかり、気をつけて食べていた | | 高）スプーンを返さず食べられるようになってきた |
| ↓ | 低）スプーンを使って食材を口へ運ぶ | ↓ | 低）苦手なものでも1口でもたべてみる |
| | 高）自分で1口量をすくってみる | | 高）少しの間、下手持ちで持つ |
| 9/13（土） | 低）さりげなく介助し、スプーンが使えるようにしていく | 10/18（土） | 低）保育者に見てもらい食べられた喜びを味わえるようにする |
| | 高）1口量をその都度知らせる。自分でできたときはほめる | | 高）持ち方をさりげなく伝えていく |
| 第3週<br>9/16（火） | 低）声を掛けるとスプーンを持ち食材を口へ運んでいる | 第3週<br>10/20（月） | 低）声掛けをし励ますと1口、口にいれるようになった（補足：きらいなものを） |
| | 高）一口量が分かってきている子もいるが、たくさん口に入れてしまう子もいる | | 高）声をかけると下手持ちで持っているが、しばらくすると、持ちかえる |
| ↓ | 低）スプーンの正しい使い方を知る | ↓ | 低）スプーンを下手持ちで真っすぐに口に入れる |
| | 高）スプーンの正しい使い方を知る | | 高）少しの間下手持ちで持つ |
| 9/20（土） | 低）その都度、ただし使い方を知らせていく | 10/25（土） | 低）声かけし、さりげなく手を添えて介助していく |
| | 高）その都度、ただし使い方を知らせていく | | 高）持ち方を伝え、できたとききにはほめる |
| 第4週<br>9/22（月） | 低）スプーンで遊ぶ子はいなくなり、スプーンで食べる様になってきた | 第4週<br>10/27（月） | 低）食べこぼしがへった子もいるが、スプーンを返して口に運ぶ子どももいる |
| | 高）上から握って持つ姿がまだ多くみられる | | 高）少しの間下手持ちで食べるが、引き続き声掛けが必要 |
| ↓ | 低）保育者と一緒にスプーンを使って食べる | ↓ | 低）下手持ちですくう事に慣れる |
| | 高）スプーンを保育者に声かけされながら、正しく使おうとする | | 高）少しの間、下手持ちで持つ |
| 9/30（火） | 低）声かけや介助でスプーンで食べることに慣れるようにしていく | 11/1（土） | 低）さりげなく持ち方を伝えていく |
| | 高）無理強いせず、声かけをする | | 高）食べ始めの時、持ち方を知らせる |